

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

ソロンガ

【所属】(助成決定時)

愛知県立大学客員共同研究員

【研究題目】

中国における伝統文化の「復活」の社会背景について—モンゴル帝国に由来する「白いスウルデ」祭祀の「復活」を事例に—

【研究の目的】(400字程度)

経済発展やグローバル化が進行する今日、中国政府は地方文化の多様性を奨励する策をとるようになり、伝統文化の「復活」が多くみられる。特に、2000年以降、中国一大プロジェクト「西部大開発」の一環として観光開発が進められることによって、地域の伝統文化が見直されるようになり、そうした現象が顕著となっている。しかし、そこで奨励される文化は、特に社会主義中国の建国当時から文化大革命が終わるまで、その政治的な判断により、古き伝統は「悪しき習慣」や「迷信」とみなされ、かつて否定された「伝統文化」である。近年、中国内モンゴル自治区において、モンゴル帝国期からの伝統祭祀である「白いスウルデ」祭祀が、三か所でそれぞれ独自の形で並行して行われるようになった。本研究では、この三つの事例の比較と考察を通じて、現在の中国における「伝統の復活」の背景と意味を探り、「伝統の再創造、再編」の重層性とその相互作用、モンゴル人のアイデンティティ、その社会背景、国家・政府との関係、マジョリティである漢人との関係を明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、これまでの研究を踏まえ、より一層深めた研究を行った。具体的には、今まで長期的に観察することができなかった先述した三番目にでてきたかつての都の遺跡「元上都」があるシリングル地域へもう一度長期現地調査を行い、また、今まで400年近く「白いスウルデ」祭祀伝統が受け継がれてきたオールドス地方でも補足調査を行って、データの面で充実させた。文献調査には、日本国内外の「白いスウルデ」祭祀に関する英語、日本語、中国語、モンゴル語で書かれた論文を全体的に検討した。

少数民族地域を中心に進展してきているローカルなエスニシティの復興という現象を、文化人類学の視点から、その重層的で多面的な構造を分析することを目的とした。世界規模でグローバル化が進行する現代、一見それとは逆行するかのようなナショナリズムの復興、ないしはエスニシティの復権という現象が、国家単位でのナショナリズムだけではなく、ローカルな伝統文化において起こってきているが、特に現代中国の内モンゴル自治区における民族のアイデンティティにかかわる伝統的祭祀の「復興」、「再編」、「継承」といった多面的現象を分析し、文化人類学や社会学で闘わされてきているナショナリズムやエスニシティにまつわる論争(ホブズボーム、スミスらの議論やギアーツ、グレイザー&モイニハンの見解)に一定の寄与を行うことも視野に入れて研究がなされた。

主な調査内容：

- ①祭祀の内容、意味、由来
- ②祭祀集団による祭祀の復活の経緯、要因
- ③伝統的祭祀集団の系譜、歴史、組織など
- ④新たな祭祀集団の組織化、祭祀の「創造」、「移植」の経緯、関係者、祭祀集団の組織と役割分担等
- ⑤関連の歴史文書の収集と分析
- ⑥祭祀集団のそれぞれ社会に与える影響

- ⑦主に二つの「新祭祀」に関わる、国家政策、政府関与、投資などの面
- ⑧祭祀の「復活」とモンゴル社会のエスニシティへの影響

【結論・考察】（４００字程度）

そもそも、文化人類学において、いわゆる「伝統復興」現象は、移民社会を中心に「ニュー・エスニシティ」と呼ばれる視点から研究が進められてきた。そうした視点からは、「伝統復興」現象は、「原初的な愛着」[ギアーツ 1987]と呼ばれるエスニック・アイデンティティの側面と、「用具論」[グレイザー&モイニハン 1986]と呼ばれる経済的利益の側面から捉えられ、また、その両者の複合として捉えられてきた。確かに、一面では、中国各地で起こっている現象もその枠組みでとらえることができよう。ただし、本研究の研究対象である中国社会の場合は、中央政府の少数民族政策という国家の政策との関わりがより重要であるとともに、また本研究の対象が移民社会ではなく、本来の土着的民族であることから、本研究が対象とした事例では、そのエスニック・アイデンティティも長い伝統の歴史的背景が絡み合った複合的な現象であることが浮き彫りにされた。その祭祀を実施する集団自体が一枚岩ではなく、民族性や社会階層、職種などにおいて重層性を持ち、そのことが新たな「伝統祭祀」の再編や移植に結びついているのである。